
あの頃のキミと僕へ・・・

月見 侑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの頃のキミと僕へ・・・

【Zコード】

Z8981A

【作者名】

月見 侑

【あらすじ】

田舎から都会に出てきた僕は毎日が閉塞感でいっぱいだった。毎日せわしなく働いていても生きている実感のない毎日だった。そんな折、旧友から一枚の手紙が届く。それは同窓会開催の手紙だった。僕は自然と過去を振り返るようになり忘れていた記憶を探る。そして、一枚の古びた手紙を見つける・・・

第1話・回窓会へ・・・

田覚し時計が鳴った。なぜいつもこのときの田覚し時計は姿をくらますのだろうと頭で考えていた。布団のそばにあるはずの田覚し時計なのに探つても探つても田覚し時計に触れることができなかつた。しうがないので体を起こし、音の方にまだ線のよつた田を向けた。

「・・・なんで棚の上にあんの?」

田覚まし時計はコンポやら書物やらが陳列されているラックの最上段にぽつんと置かれていた。

「あー、やついや・・・」

そうだつた。昨日の晩、明日は早く起きよつとわざと田覚し時計をわざわざあんなところに置いたのだった。おかげさまで田覚し時計と昨日の僕にいっぺんわされた朝になつた。

「・・・余計なことしなきやよかつたな」

布団から這い出ると田覚まし時計を止めてカーテンを開けた。太陽はあいかわらず強すぎる光で大歓迎してくれた。

洗面台で洗顔と歯磨きを済ませ、朝食を作つた。パンとブラックのコーヒーとハムエッグだ。テレビからはどつかの国の内戦の情報が流れていてermenテーターがそれについて解説していた。まだ覚めない目でそれを見つめパンをさくさく食べていた。

「んく、眠い・・・」

ブラックの「コーヒーもまだ眠気には効果が現れず寝ようと思えば椅子に掛けたままで寝れるほどだった。僕はパンを飲むようにして食べ終え、コーヒーを一気に飲んで朝食を終えた。そして田舎に帰る仕度をし始めた。

田舎から都会に状況してきてもう8年がたつていた。別に都会へのあこがれがあったわけじゃなかつた。ただ、このまま田舎で働き、適当に就職して適当に結婚して適当に子供を産んで適当に死んでいくのは避けたかつた。そう思うとやはり都会になんらかの期待があつたのか、今でも考えてしまつものだつた。僕の田舎と都会の考えはともかく、結局都会での生活は閉塞感でいっぱいだつた。休まる日がなかつた。かといって田舎に帰る決心もなく、ずるずるここまでやつてきたのだつた。

そんな折だつた。田舎の旧友から一通の手紙が届いた。普段あまりポストに手紙が入る事はないので、なんだかちょっとうれしかつた。手紙の内容は高校の同窓会の開催だつた。日時や場所が記載されていた後に手書きで「今年はちゃんと来いよ！みんなお前に会いたがつてるぞ」と書かれていてちょっと面白うつた。僕は4年前の同窓会には出なかつた。仕事が沢山あつたし、なによりこんな疲れきつた顔で会えるものかと思つていた。もうとっくに忘れられていると思つたのに・・・

返事を出すのに3日かかつた。いろいろ考えていた。今あつたら皆になんて言われるだらうとか、クラスにどんなやつがいたかとか、そんなことだつた。結局同窓会に出ることにして、その旨を返事にした。正直、田舎の連中に都会での生活や愚痴をたれて普段は得ることのできない優劣な気分を味わいたかつた。そうすることで不幸

自慢するほど僕は大変なんだよ、田舎で暮らしているやつらには分からないだろうけどなどと思ったかつたのかもしれない。最終的にはそんな不純な動機が僕を田舎の同窓会へ向かう決心を固めさせた。

でも、正直怖かつた。そんなこと思ひようにしていても、変わりきつてしまつた僕を見て皆が哀れむような目で見られたら、同情されたりしたらと思うと怖くて仕方なかつた。

結局、僕は無機質な社会で育て上げた哀れな自尊心と旧友達をさげる氣持ちと弱い心を携えて田舎にむかうことになつたのだつた。

とりあえず田舎へ帰る準備は簡単に終わつた。有給は3日だつたのでそう長居はできなかつたし、する気もなかつた。有給をとるときにも上司に文句を言われつづけたのを思い出してため息をついた。

新幹線が出るまでまだ時間がありまつていた。かといって外に出る気分でもないので卒業アルバムを見ることにした。卒業アルバムは埃まみれになつていた。田舎からこつちに来るのに、寂しいだろうから一応持つてきただが、結局最初だけでそれ以降、今日まで開くことはなかつた。

バラバラとめくると自分のクラスのページになつた。そこにはもうどこにもいなかつての自分がぎこちなく笑つっていた。そうだ、なかなか笑顔ができるないので友達がカメラマンの後ろで笑わせてきたのを思い出した。だからなんか我慢したような笑顔になつてるんだ。僕は笑つてしまつた。

手紙を出してきた旧友はうまく笑つていた。妨害する前にOKだつた。僕もみんなも「つまんねー」といったのを思い出した。

そのまま自分のクラスを見ていると一人の女の子に目が止まった。その子もなんだか我慢したような笑顔をレンズに収められていた。

「なつかしいな・・・元気かな」

その子は小、中、高校時代に仲の良かった女の子だった。恋人ではないが友達以上といったところか。笑顔がかわいい女の子だった。決して美人ではないが周囲の人間を元氣にするようなそんな子だった。よく遊んだし、よく話した仲だった。そういうえばこっちに来るときも見送りに来ていた。目に涙を浮かべて「しおつちゅう戻つてきてね」としきりに言っていた。僕は「すぐに戻つてくるよ。連休があつたらすぐに。」・・・本気でそう思つていた。結局、僕は戻らなかつた・・・

そういえば・・・

彼女が最後に言つた言葉を思い出した。

「ねえ、向こうについたら制服の胸ポケット見て・・・それと、忘れないでね、私のこと」

制服の胸ポケット・・・？ そういえばこっちにくるときに持つてつたんだつた。僕は卒業アルバムを膝からどかして、クローゼットに向かつた。しかし、クローゼットの中に制服はなかつた。確かに持つてきたはずなのに。目を下に向けると未開封のダンボールがあつた。僕は急いで引っ張り出し、ガムテープをはがした。中には高校時代の物があつた。

「意外と未練がましかつたんだな・・・」

制服を探しながら思った。制服はすぐに見つかった。そのほうにたたまことに丸めてあつた。埃やらなんやらがいっぱいできたなかつたのでベランダではたいた。ソファーに座り制服の胸ポケットを探ると一枚の手紙が出てきた。なんだかあの頃の匂いがしたような気がした。一気に懐かしさの気持ちで胸がいっぱいになつた。手も震えていた。

「いつのまにこんなもの・・・」

僕はおそるおそる緊張してあの時の香りがする彼女の手紙を開いた。
・・・

第2話・時をまたいだキミの手紙・・・

古びた手紙には当時の彼女の切実な想いが記されていた・・・
『これを見る頃にはもう新しく生活するところに着いたかな？（なんかドラマみたいだね。ちょっと恥ずかしいかも）とにかく、面と向かうと恥ずかしくて言えないこと、たくさんあります。なので手紙にしました。』

初めて会ったのは小学校だったね。覚えてる？私が「ラン」から落ちて膝すりむいて泣いてたときに保健室に連れてっててくれたね？あの時は私誰も友達がいなくて誰もそばにいなくて寂しかった。だからキミが駆け寄つて心配してくれてすごくうれしかった。安心して涙が止まらなくてキミ、オロオロしてたね。とにかくすごいうれしかった。そして、キミが初めての友達になってくれたね。内気だった私を後押ししてくれてみんなの輪の中に入るようにしてくれて、おかげで私、友達沢山できたよ。今でも付き合いあるんだよ？知つてた？とにかくありがと♪。

中学生になつてもキミは私の一番大事な友達だったね。覚えてる？学級委員長だった私が文化祭の出し物決めようとした時、（なんであの頃の男子つて妙に斜に構えてるんだろうね）男子がうるさくて何にもできなかつた時に「うるせえ」と叫んでくれたね。おかげで男子は静かになつて無事に出し物が決まつたね。でも、そのおかげでキミが演劇の主役になつちゃつたんだよね。今でも覚えてる。まさに大根役者とはこのことだね！って思った。

受験の時は私がお世話したね。思えば助けられてばかりの私がやつとキミを助けることができた時だね。勉強はじめるとすぐに眠くなる癖、もう治つた？とにかく私のおかげで無事合格できて良かつた。私はきっと、キミよりもうれしかつたと思つ。また一緒に生活できるんだからさ。

高校は、こちばん濃い生活だった。キミも私も部活に入つて、試合

があつたらお互い応援しに行つて。最後の大会の時、私負けちゃつて、大泣きしちやつた時一晩中そばにいてくれたね。えーと、このことは忘れてください。恥ずかしい思い出だから。とか言つとキミは絶対「なら覚えてるよ！」とか言つて忘れてくれないんだろうね。意地悪だからさ。

そういえばケンカも沢山したね。いつつも君が折れて謝つてくるの。気が弱いんだから。そういうとこちゃんと直さないとそつちに行つたら生きていけないんじやない？大丈夫かな？ちょっと心配です。

なんか言つたことつていうか思い出綴つただけになつちゃうね。これでも何回も消したりしたんだけど、書いてるとこつなつちゃうから、仕方ないよね（開き直りかな？）

正直、キミがいなくなるの嫌です。もうずっといたのに、いなくなつちゃうの？ってね。こないだ理由知つた時は正直悔しかつたよ。「このまま田舎でつまんなく人生終えたくない」つて、正直泣いちやいました。だって、私はキミのなににもなれなかつたんだなつてさ。自分そんなことないつて言つんだろうね。でも、そりなんだよ、それは。でも、私止めません。私に留める権利はないもの。

なんだか長くなつちゃつたね。このまま読まれて「ホームシックにかかつた」とか言われても困るからさ、ここらへんで終わります。まだまだキミに伝えたいこと沢山あります。今度は会つて伝えたい。だから、約束してください。4年後の2月11日、初めて話したあの公園のブランコのところに来てください。私をすこしでも想つてくれているなら、それだけでいいから。私待つてるから。

新しい土地であなたがいつものように明るく、健康で、幸せであることを祈ります。

またね

彼女の手紙にさよならは無かつた。

僕は自分が泣いていたのに今気づいた。古びてやけ果てた紙に僕の涙が染み込んでいた。涙が止まらないのは初めてだった。なんでこんなに自分のことを心配してくれている人を忘れていたのだろう。

「なんで、なんでこんな書くんだよ・・・約束つて・・・もう4年も過ぎてんじやんか。俺、馬鹿じやん・・・」

手紙の最後には普段自分にお願いをしない彼女が僕に約束をお願いしていた。4年前、初めて会ったプランノ・・・

4年前、彼女は僕を待っていたのだろうか。冬の寒い時に白い息を吐きながら冷たくなった手を温めていたのだろうか・・・どれくらい待つたのだろうか。

「その頃、俺、お前のこと・・・何にも考えてなかつた・・・ゴメン、ゴメンな」

手紙に向かつて何回も何回も謝つた。

・ ふと、カレンダーを見つめた。なんですが気づかなかつたのか・・・

「2月11日・・・今日じやねえかよー」

約束の時はもう過ぎてしまつたけれど、もう戻つてこないけれど行かなきやならない。

約束を果たしに、約束から4年後の今日に

僕は涙を拭うと旅行カバンを持つて手紙をポケットに閉まって玄関から出た。

「「めんな・・・今度こそ、果たさなきや

自然と僕は走り出していた・・・

第2話・時をまたいだキリの手紙・・・(後書き)

是非感想ください。すゝめ励みになるひとつでもうなしこですー。よろしくおねがいいたします

第3話・腐った自分（前書き）

更新が全然できなくて読者皆様、本当にすみませんでした。
批判等頂けたらうれしいです。

感想・

第3話・腐つた自分

10時の東北新幹線に乗つて僕は山形に向かつていた。

多分、あの手紙を見る前に向かつてたとしたら、僕の帰郷は短いものだつたに違ひない。今はとにかく長くて長くて仕方がなかつた。車窓から見える景色もゆつくりゆつくり僕の眼の端から見えなくなつていく。そうだ、なんて言おう。公園にいなくともあいつの家に行こう。謝らなきや。ずいぶん待たせてしまった。怒つてるかな…。どうしてるかな…。でも、

本当に待つてるのかな…？

ふとそんな考えが頭をよぎつた。もうあれから何年もたつている。約束の4年後でさえ待つてたのだろうか？人の気持ちなんて簡単に裏返つてどこかに去つてしまふんだ。簡単に田舎の友人をきつてしまつた僕のようだ。まして、学生の頃の恋人遊びのような約束に、なんて。なんで手紙を読んだときに泣いたのか…今考えたら恥ずかしい話だ。たぶん、不意打ちだったんだ。記憶に残らないような生活の中でいきなり頭の中をくすぐられたからに違ひない。なにも期待するべきではないんだ。第一本当に待つてたとしてもなんて言えばいい？

「「めん、忙しくて忘れてたんだ。すまない。これからやり直そう」とでも言つつもりか。さすがにそんな虫のいい男じやない。

最低だ。僕はいつからこんな最低な人間になり下がってしまったのか。いまさらあいつに会いたい自分とあいつを疑つてしまつ自分が同居していくもうどうしたらしいのかわからない。最低だ…いつたいなにが僕をこんなに腐つた人間にしてしまつたのか？無機質な都會での生活か？いまさら出てきた手紙か？それとも僕自身なのか。

会えない

こんな気持ちのまま会うことなんてできない。会つても何も変わらない。どちらも無駄に傷ついておしまいだ。そうだ、時間は戻せない。あのころの僕と彼女の関係には戻れない。帰るんだ。山形についたらすぐにでも帰りの電車に乗ろう。決めた。会つべきじゃないんだ。

車窓から見える景色はもつ都會の景色と一緒にだつた。

新幹線が山形着き、乗客はせかせかと外に向かっていった。僕だけが、僕の足だけが動こうとしない。

落ち着け、すぐに帰れる。改札を出たらすぐに切符を買うんだ。それでおしまいだ。震える足を叩いて僕はサッと立つて歩きだした。正直、僕は怖かったのだろう。もしかして、誰かに見つかるかもしれない。今、会つたらなんていえばいい?どんな顔をしたらいい?自意識過剰だろうが、かまわない。誰にも僕の姿を見られたくなかつた。すぐに帰るのだ。この空気はいやだ。この場所もいやだ。早く帰りたい、あの無機質だけど生温くて気持ちいい世界に。

僕はあたりを見回すよつと改札から出て切符売場に向かった。

「お、来た来た!待つてたぞ?」

いきなり目の前に現れた顔人間は僕に向かってそう言つと笑つた。本当に心臓が止まるような一瞬つてあるのかと思った。目の前にいる男はまぎれもなく僕に同窓会の手紙を送つてきた男だった。

「あいかわらず時間ぴつたりだな。つて当たり前だな。新幹線で來たんだしな。…久し振りだな。元氣にしてたか?」

男はそう言つと、僕の荷物を手にとつて歩き出した。真っ白になつていた僕は、あわてて言葉をひねり出した。

「なんだ、お前がいるんだ? 武…」

武は振り返ると笑いだした。

「なんであつて…お前が手紙よこしたんだべ? 返事に新幹線の時間書いて返事を書いたのだった。また、僕自身にしてやられたんだ。」

「ああ、やつだつたな。武、元氣だつたか? 今日はわざわざありがとな。」

とりあえず動搖した姿は見せられないんだ。できるだけ冷静に返事をした。武はまるで高校時代からそのまま素直に生きてきたようで、そのままだつた。

「ああ、俺は元氣だつたよ? あいかわらずいつまは何にも変わってねえ。お前は?」

もう武を直視できなくなっていた。なぜか知らないけど胸が圧迫されて今にも泣きそうだ。なんでそんなに笑つているのか…

「僕は、元氣だつたよ。都會での生活も楽しくてな、だから前の同窓会は出れなかつたんだ。」めん。今回も来るか迷つたんだけど、どうしてもみんなに会いたくなつてしまへんで、いつして来たんだ。」

武は笑顔から一瞬真面目な顔になつて僕の眼を見ついたが、すぐに笑顔になつて、言った。

「やつかそつか。元気ならよかつたよ。心配したんだからよ?」

武は僕の手荷物を右の肩に持ち替えて、くるりと僕のほうを向いた。僕は一瞬おびえたようになつた。武は笑いながら言った。

「おめえ、「僕」なんて言つたつけ?」

「は…?」

僕は武が言つてゐたことの意味がよくわからなかつた。ただえさえ今はこゝから逃げ出したい一心なのに…。

「お前は、もうあん時のお前じゃねえんだな…」

武は悲しく笑いながら消え入るような声で言つて、また歩いて行つた。なんだかとても落ち込んでいるみたいだつた。僕は武が言つた意味がよくわからなかつた。

僕は帰ることができなくなつた。どうやら駅の外は雨が降つてゐるらしく、床は濡れ、空気ははじめじめしていた。

第5話・誓い（前書き）

更新が全然できないため読んでくれる人は限りなくすくないと思います。それでも自分の小説を誰かに見てもらえるというのは幸せですね。感想お待ちしています。

案の定、山形の空は灰色で、したたる雨はなにか懐かしいにおいがした。

武はビニール傘を俺に手渡して手招きした。僕はできるだけ笑顔で礼を言つて傘を開いた。

武の車はまさに便利な乗り物としての役割しかなさそうだった。手入れはされておらず、ボディには泥が跳ねている。それが彼らしいと思った。

武は高校の時からずぼらだった。机の中は見るに堪えないものだつたし、体操服は半年に一度洗濯していたぐらいだ。僕はどちらかといふと几帳面な方だった。なぜ武と親友になれたのだろうと考えてみても埒があかないでのうにしていた。あの頃は何も考えずに親友でいられたのに…

武に促され助手席に乗ると微かに匂いがした。武は僕はスンスンしているのに気づいたのか軽く笑つてため息をついた。

「ラベンダーだ」

「ラベンダー？ そんな趣味あつたのか？」

武は軽く自嘲しながらサイドブレーキを下ろした。武の車はずいぶん使いならそれでいるのだらつ、スムーズに進んだ。

「うちの嫁さんの趣味だよ。俺が「ラベンダー」なんて嗅ぐ性質にみえるか？」

僕はシートベルトをつけながら確かにと言つた。武が結婚したのは3年前か…

「結局、お前は俺の結婚式にも来てくれなかつたしな。盛大だつたんだぞ！」

だんだん緊張がほぐれてきた。武はハンドルから手を放し大きく手を広げた。彼の持ち味が僕をリラックスさせる。

「「めん。仕事がー」

「忙しかつたつてか？まあ、いいけどな

何もかも見透かされたような気分だつた。僕の薄っぺらい言い訳は終えることなく途絶えた。武はしじうがないと2回繰り返した。気を使つてくれているのが辛い。緊張はまた僕を掴む。窓の外は小雨になつていて。それでも湿り気のある空気が首元にまとわりつくような気がした。居住まいが悪くなつたのか、武は音楽をかけだした。ジャズだつた。しかもバラード。

「え…」

「奥さんの趣味だつて」

武はひとつ言のうと口に言つた。なんだか武は変わつてしまつたようだ…そんな気がした。それとも、僕だけが違う空間にいすぎて変わつたのか。無機質でモノクロの生活、暗い空に汚れた空気。そんなものが僕を変らせてしまつたのか。つまらなく弱い人間に。

上京したとき新宿駅の人ごみを見て冷汗が出たのを覚えている。会社員がよく通る時間帯だったっていうのもあるかもしだれないが、本当に灰色の世界だった。各自決められた場所へ戻つていくような、鎖で繋がれた獣がもがくような、自由に歩いているようなのに束縛されているような…そんな光景だった。

そうだ。あの時、僕は誓つたじゃないか…

僕は、僕だけはこのモノクロの世界で頑張つて色を纏つていよつて…

大きなバッグと大きな不安と大きな誓いを抱いて新宿駅のど真ん中にたつていたじゃないか。

「誓つたじゃないか…」

もつほとんど降つていない雨に向かつて、その向こうの雲に向かつて僕は言った。

武はこっちをちょっと見ていたようだが、僕が前を見ると素早く何食わぬ顔をした。僕は軽く笑つた。

「変つたようで、変わつてねえのかな?」

武は眼前に広がるきれいな世界に、青い世界に向かつて言った。その声は空に向かつて吸い込まれた、ような気がした。

雨あがりの故郷はラベンダーとジャズ、青い世界に白い雲に包まれ

ていた。

もうすぐ到着だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8981a/>

あの頃のキミと僕へ・・・

2010年12月9日04時58分発行